

「蜻蛉」巻、明石中宮への侍従出仕の意義

——「夢浮橋」巻の先にはほの見えるもの——

星 山 健

一、はじめに

本稿でとりあげる侍従とは、『源氏物語』宇治十帖において、ヒロイン浮舟の側近の女房として活躍する女性である。彼女は「蜻蛉」巻、浮舟失踪の後、明石中宮のもとに出仕する。本稿ではその設定に、今後の布石としての意味を読み解くことを通して、現存最終巻「夢浮橋」以降にどのような物語展開が待ち受けているのかを考察するものである。

二、明石中宮への出仕の不自然さ

侍従が明確な形で物語に登場する最初は「東屋」巻である。⁽¹⁾三条の小家で浮舟と契った薫が彼女を宇治へと連れ出す際、『人一人やはべるべき』とのたまへば、この君に添ひたる侍従と乗りぬ（六一―九四）というように、薫のことは受け、侍従は近習の女房として牛車に同乗している。彼女が大きな働きを見せるのは、匂宮と浮舟の関係が生じた以降である。匂宮再訪の折、浮舟の乳母子右近は一人では事態に対処しきれなくなり、侍従に秘事を打ち明け、匂宮と浮舟が対岸の家に小舟で向かう際にも彼女を同行させる。語り手に「色めかしき若人」（六一―一五三）と評される侍従は、すぐに匂宮に魅了され、以後、二人の秘められた関係の継続のため尽力することとなる。

浮舟失踪後、身動きの取りづらい右近の代役として匂宮側への対応を担ったのも彼女であった。まず、浮舟の訃報に

「蜻蛉」巻、明石中宮への侍従出仕の意義——「夢浮橋」巻の先にはほの見えるもの——

疑念を抱いた匂宮が宇治へと時方を使わした折、対面を断る右近に代わり彼と面会し、浮舟の失踪をほのめかす発言をしている。後日、時方が再訪し、右近に二条院への上京を求めた際にも、にわかにかこを離れられない彼女の代理として匂宮のもとに向かい、事情説明をしている。

何ばかりのものとも御覽ぜざりし人も、睦ましくあはれに思さるれば、「わがもとにあれかし。あなたももて離るべくやは」とのたまへば、「さてさぶらはんにつけても、ものみ悲しからんを思ひたまへれば、いま、この御はてなど過ぐして」と聞こゆ。「またも参れ」など、この人をさへ飽かず思す。(六一二二八〜二二九)

その対面の折、匂宮は侍従に対し「わがもと」、おそらくはこの二条院寢殿において自分付きの女房として働くことを勧める。ただしここでは、「御はて」が過ぎてから改めて侍従が申し出ることにより、ただちにそれが実現することとはなかった。

本稿において問題視するのは、以降の展開である。

心のどかにさまよくおはする人だに、かかる筋には身も苦しきことおのづからまじるを、宮は、まして、慰めかねたまひつつ、かの形見に、飽かぬ悲しさをもたまひ出づべき人さへなきを、対の御方ばかりこそは、「あはれ」などのたまへど、深くも見馴れたまはざりけるうちつけの睦びなれば、いと深くしもいかでかはあらむ、また、思すまゝに、恋しや、いみじやなどのたまはんにかたはらいたければ、かしこにありし侍従をぞ、例の、迎へさせたまひける。

皆人どもは行き散りて、乳母とこの人二人なん、とりわきて思したりしも忘れがたくて、侍従はよそ人なれど、なほ語らひてあり経るに、世づかぬ川の音も、うれしき瀬もやあると頼みしほどこそ慰めけれ、心憂くいみじくもの恐ろしくのみおぼえて、京になん、あやしき所に、このごろ来てゐたりける、尋ね出でたまひて、「かくてさぶらへ」とのたまへど、御心はさるものにて、人々の言はむことも、さる筋のことまじりぬるあたりは聞きにくきこともあらむと思へば、うけひききこえず、後の宮に参らむとなんおもむけたれば、「いとよかなり。さて人知れず思しつかはん」とのたまはせけり。心細くよるべなきも慰むやとて、知るたより求めて参りぬ。きたなげなくてよ

ろしき下臈なりとゆるして、人も譏らず。大將殿も常に参りたまふを、見るたびごとに、もののみあはれなり。いやむごとなきものの姫君のみ多く参り集ひたる宮と人も言ふを、やうやう目とどめて見れど、なほ見たてまつりし人に似たるはなかりけりと思ひありく。(六一―二六一―二六二)

浮舟喪失の悲しさを癒やしきれない匂宮は、後日改めて侍従に出仕を要請する。彼女はその誘いをかたじけなく思いながらも、中の君の住まう二条院で働くことには抵抗を感じ辞退する。その彼女の心理は十分に理解可能なものである。問題は彼女が代案として明石中宮への出仕を希望し、かつ匂宮がそれを了承しながらも、彼の力添え無しにそれが実現していることである。

「知るたより求めて参りぬ」とあるが、「いとやむごとなきものの姫君のみ多く参り集ひたる宮」と世評も高い中宮のもとに、所詮浮舟(事実上受領の娘)如きに長年仕えた田舎女房の侍従が、どのような伝手を持っていたのだろうか。この出仕に関し匂宮は、一切口添えをしていない様子である。「下臈」としてとはいえ、侍従単独の力でそのような出仕がにわかを実現するとは、いささか無理のある設定ではないか。それも、先に匂宮の誘いをいったん断る際に理由としていた「御はて」もいまだ明けていないにもかかわらずである²⁾。

そして、匂宮側の反応にも不可思議な点がある。彼としては、亡き浮舟の「形見に、飽かぬ悲しさをものたまひ出づべき人」を求めていたはずである。「思すままに、恋しや、いみじやなど」と、気兼ねなく語らうためなら、自分の後押しにより姉女一宮に出仕させることも可能だったはずである。匂宮が過去に関係をもった女性を二人三人と女一宮のもとに参らせているという話が「浮舟」巻にあった(六一―一七六)。それと同様の形を取った方が、彼には本来好都合だったであろう。それが、自らくつろげる二条院でもなく、親しい姉女一の宮のもとでもなく、浮舟との関係をもっとも知られたくない母中宮のもとに彼女が仕えるというのでは、彼にとつてデメリットが大きいはずであるのに、「いとよかなり」とすんなり認めているのも疑問である。

つまりこの一件、作中人物の判断・選択としては、不自然としか評しようがないのである。やはり、侍従の明石中宮への出仕には、作中人物の意志を超えた物語の意志、作者の意志が働いていると考えざるを得ない。

ではそこで、現実に出仕後の侍従がどのような活躍を見せているかという点、それは皆無に等しい。

例の、二ところ参りたまひて、御前におはするほどに、かの侍従は、ものよりのぞきたてまつるに、いづ方にもいづ方にもよりて、めでたき御宿世見えたるさまにて、世にぞおはせましかし、あさましくはかなく心憂かりける御心かな、など、人には、そのわたりのことかけて知り顔にも言はぬことなれば、心ひとつに飽かず胸いたく思ふ。宮は、内裏の御物語などこまやかに聞こえさせたまへば、いま一ところは立ち出でたまふ。見つけられたてまつらじ、しばし、御はてをも過ぐさず心浅しと見えたてまつらじ、と思へば隠れぬ。(六一―二六五―二六六)

出仕後の彼女の物語登場は右の、「蜻蛉」巻後半においてこつそり匂宮・薫を同時に垣間見る場面だけであり、明石中宮のいる六条院に匂宮も多く出入りしているにもかかわらず、侍従が彼の心を慰めるような場面は設けられていない。つまり物語としてそのような役割を担わせるために改めて彼女をここに出仕させたわけではないことは明らかである。

野村倫子氏は、先に引用した部分の最後、「いとやむごとなきものの姫君のみ多く参り集ひたる宮と人も言ふを、やうやう目とどめて見れど、なほ見たてまつりし人に似たるはなかりけりと思ひありく。(六一―二六二)に着目し、侍従の浮舟を評価する役割を重要視する。たしかに結果として、彼女がそのような機能を果たしていることは事実であろう。しかしながら、彼女に浮舟を六条院の女房と比較させる程度のこと、物語として無理を冒してまで彼女を明石中宮に出仕させることの目的だったとは考えにくい。

侍従の出仕は作中世界の自然な展開としてではなく、何か作者の明確な意志のもとになされた。そして、それは「夢浮橋」巻末までという、結果的にこの世に残された『源氏物語』内においては、どう見ても達成されていない感がある。そこで想像されるのが、『源氏物語』が「夢浮橋」巻以降も書き継がれた場合の布石としての役割である。

三、秘密漏洩の布石としての出仕

侍従の出仕は、なぜ物語上要請されたのか。そして、なぜ出仕先が匂宮本人や女一宮ではなく明石中宮のもとだった

のか。その答えを探る鍵は、「手習」巻後半において明石中宮が果たす役割にある。

横川僧都は女一宮の夜居を勤めた際、「御物の怪の執念きこと、さまざまに名のるが恐ろしきことなど」(六一三四五)を話すついでに、宇治である女性を救ったこと、今その女性が出家して小野にいることなどを語った。それ聞いた明石中宮と小宰相の君は、その女性がおそらく例の薫の思い人(浮舟)であろうと気づく。そして後日、悲しみに暮れる薫の様を見た明石中宮は、小宰相の君を介して浮舟生存の事実を彼に伝える。

驚いた薫は、すでに匂宮がその事実を知るのではと危惧し、明石中宮と再度対面し、それを尋ねたところ、匂宮は今のところそれを知るはずもないし、母として今後とも知らせたくない旨を薫に伝える。こうして、続く最終巻「夢浮橋」では、再会を求める薫と浮舟の動向が追われていくのだが、では匂宮はもはや物語展開の埒外に追いやられてしまったのか。いや、そうではあるまい。明石中宮のもとには侍従がいる。

下藤の女房とはいえ中宮のもとに勤めていれば、彼女が浮舟生存の情報を知りうる機会は十分あり得よう。というよりも、まさにそのために設定された、彼女の中宮への出仕なのではないか。

そして、浮舟の「御はて」を待たずに彼女の出仕がなされたことには、彼女を小宰相の君と一対の存在とする意図が読み取れよう。

大将殿の、からうじていと忍びて語らひたまふ小宰相の君といふ人の、容貌などもきよげなり、心ばせある方の人と思されたり(中略)この宮も、年ごろ、いといたきものにしたまひて、例の、言ひやぶりたまへど、なか、さしもめづらしげなくはあらむと心強くねたきさまなるを、まめ人は、すこし人よりことなりと思すにんありける。(六一二四五)

右は「蜻蛉」巻、小宰相の君初登場の条である。匂宮に言い寄られながらも靡くことなく薫に心を寄せる小宰相の君は、薫と浮舟の本来的な関係を知りながら匂宮へと強く惹かれていった侍従に対し、ある意味対照的な存在である。その小宰相の君の登場に合わせるようにして、侍従の明石中宮のもとへの出仕が設定されているのである。

まさに匂宮びいきの侍従なら、たとえば中宮や小宰相の君の会話を漏れ聞くような形で浮舟生存の情報を知り得た際

には、それを迷うことなくただちに匂宮に知らせることであろう。⁽⁴⁾ 侍従が匂宮の口添えも無く、自らの伝手で明石中宮のもとに出仕するという設定は、彼女が浮舟や匂宮との関係を知られることなく、そこで働くために必要なものだったと思われる。また、匂宮が当初侍従に出仕を要請した際の目的どおり、彼女を相手に浮舟の思い出を、「思すままに、恋しや、いみじやなど」(六一―二六二) 語らう場面が設けられていないのも、明石中宮が侍従と匂宮の繋がりに気づけば、当然彼女に用心するはずであり、そうなるとその後の秘密漏洩という展開に不都合が生じるからであろう。付言するならば、都社会にとつて取るに足らない存在である浮舟の、宇治から小野へ(鄙から鄙へ)の移動情報が、名実ともに都社会の中心に君臨する明石中宮を経由して薫に伝えられるといういささか不自然な設定自体、この後同じルートで同一情報が匂宮にも届くようにするためのものと推測されるのである。

四、「夢浮橋」巻以後の展開 ― 円環する物語 ―

本節においては、以上の考察を踏まえ、「夢浮橋」巻以降にどのような物語展開が予想されるのか検討したいが、まずその前に、『源氏物語』の閉じられ方に対する稿者の理解を表明しておきたい。

いつしかと待ちおはするに、かくたどたどしくて帰り来たれば、すさまじく、なかなかなりと思すことさまさまにて、人の隠しすゑたるにやあらんと、わが御心の、思ひ寄らぬ隈なく落としおきたまへりしならひにとぞ、本にはべめる。(六一―三九五)

『源氏物語』最終巻「夢浮橋」は右の記述をもつて幕を下ろす。それが主題的完結による擱筆なのか、あるいは未完のままの中絶なのかについては、これまでさまざまな議論が積み重ねられてきた。⁽⁵⁾ 近年においてはその多くがいわゆる完結説に偏る中、従来とは異なる観点から重要な提言を行ったのが今西祐一郎氏であった。今西氏は岩波書店新日古典文学大系『源氏物語』第五巻の解説において以下のように述べている。

けれどもこの際留意すべきは、『源氏物語』とは、ある巻でめでたしめでたしとなつたからといって、あるいは主

人公や女主人公が姿を消したからといって、語ることを止めるという単純な物語ではなかった、ということである。光源氏を取り巻くすべてがうまくおさまったかに見えた藤裏葉巻の直後からは、延々と続く若菜上巻が始まり、そして紫上が死に、源氏の出家が暗示されたあとには、次の世代の物語が抜かり無く用意されていたではないか。

とするなら、夢浮橋巻がもつと長く、その終わりがいかにも浮舟・薫の物語の大尾にふさわしく書かれていたとしても、それは必ずしも『源氏物語』の終結を意味するとはかぎらないのではあるまいか。

かりに現行の形ではない、あるべき形で夢浮橋巻は終わった。つまり浮舟・薫の物語は一件落着した、としよう。しかし作者はそのあとで全く別の人物を登場させて物語を継続させる権利を失ったわけではない。このことは宇治十帖の発端橋姫巻における八宮の登場の仕方を思い出せば、容易に納得できるはずである。また読者（この中には作者に命令できる人物も含まれるであろう）も同じ事を作者に望んで悪いという事はないのである。

夢浮橋巻はもう少し区切りのいいところまで書き進められるはずだったのかも知れない、というのが夢浮橋中断説、いや現行のままで大尾なのだというのが完結説。しかし、前者の場合はいうまでもないことであるが、後者の場合でも、それをもって『源氏物語』が終わったということの根拠にすることはできない。⁶⁾

近代の小説家とは異なる、女房としての紫式部の立場を考えた場合、道長のような「作者に命令できる人物」の意向を無視できるはずのないことなどを考えると、『源氏物語』に絶対的な意味での終わりのないことを説く今西氏の主張は認められるべきであろう。しかしながらその一方で、「夢浮橋」巻末が「本にはべめる」と結ばれたことの重要性も十分に受け止めねばなるまい。石田穰⁷⁾・室伏信助氏⁸⁾などが説くようにそれが作者自身の手によるものと見るならば、少なくとも作者は本巻をもっていったん筆を置き、そしてついにその続きをものすることがなかったのである。ならば我々が見極めるべきは、現存する『源氏物語』五四帖がどのような物語状況にたどり着いたところで結果として幕が下ろされたのではないか。

それを考える上で、近年の研究としては、『国文学 解釈と鑑賞』の「特集（終わり）」を読む——古典文学篇」収録の仁平道明氏「暗い（終わり）」——『源氏物語』の結末」が、まさにそのような問題を正面から取り上げた論考として

注目される。⁹⁾ 仁平氏は「夢浮橋」巻の先に浮舟や薫の救済を読もうとする説を厳しく批判する。氏は「夢浮橋」巻末の一文について、「ほんとうの愛情もないまま浮舟をなぐさみものとしてしかあつかわなかった、以前の薫の身勝手なありようが、あらためて確認するかのようには語られ、物語は終わっている」ものと捉え、「物語にかつて語られたことのない「暖かい愛情」などというものを（終わり）のさきに期待することができはずもない」とする。そして、浮舟の側についても、「仮に浮舟がふたたび薫を迎えとられたとしても、その後の薫にも浮舟にも、心おだやかな日々はあはずもない」とし、また、「僧都が、薫の意向に反して浮舟を庇護し続けることは、物語世界の設定上あり得ない」、「妹尼の庇護も、期待はできない」ゆえに、「薫を拒んだまま浮舟が現在の生活を続けられるわけでもない」とみる。以上の仁平氏の読みに賛意を示したい。その上で付け加えるならば、「夢浮橋」の先には薫・浮舟という二人の關係に収まらない修羅場が待っているのではないか。匂宮の再登場である。

侍従を介し浮舟の生存を知り得たとしたら、匂宮がじつと手をこまねいているはずがない。「手習」巻、出家後の浮舟に対し中将が、「忍びたるさまに、なほ語らひとりとてん」（六一―三五二）と思っていることなどから、一度出家した女性が残俗して再び男女の關係を持つことは当時十分あり得たようである。¹⁰⁾ その可能性があるからこそ明石中宮も、浮舟がすでに出家者であることを知りながらもその生存を息子匂宮には伝えたくなかったのであろう。それが今後、侍従を介する情報漏洩により、「手習」巻において薫が危惧していた、「かの宮も、聞きつけたまへらんには、かならず思し出でて、思ひ入りにけん道も妨げたまひてんかし」（六一―三六六）という状況が、一気に現実化してしまうのである。

薫と浮舟だけの關係であるならば、仁平氏の説くようにそれが「心おだやかな日々」ではないとしても、法体・俗体にかかわらず浮舟を薫がまたどこかに囲い、少なくとも世間に写る姿としてはおだやかに過ごすことも可能であろう。しかし、そこに匂宮が加わるとなれば話は別である。再び情熱的に言い寄るであろう匂宮、体裁を気にし煮え切らないながらも浮舟への執着と匂宮への對抗心¹¹⁾を捨て切れない薫、そして匂宮との關係を深く後悔し、また薫との再会についても一度は拒みながらも、道心堅固とは言いがたい浮舟……。三人を取り巻く状況はまさに「浮舟」巻に逆戻り、いや浮舟が出家した身であるだけに事態はより深刻である。

そこでの問題は、一にかかって女人がいかに厳しく男女の仲を拒否するかにかかっているだろう。(中略) 女人がいかに自覚的、意識的に男女の仲を拒否しうるもののかを示したものととして、ここにおける浮舟像の造型があると考えられるのである。¹²⁾

右の大朝雄二氏の論を典型とする、浮舟による薫拒否を重要視する解釈は、浮舟を近代女性であるかのように、その個人としての自立性を高く認めすぎたものと言わざるを得ない。ここに至るまでの物語において、薫や匂宮が彼女の意志を尊重したことがあつただろうか。たしかに薫は、大君に対しては彼女の心を重んじ、最終的に死を持って隔てられるまで無理に逢瀬を果たすこともなかった。また匂宮は、無理を冒してまで中君のもとに三夜連続で通い、最終的には彼女を妻の一人として伝統ある二条院に迎えている。しかし、それは彼女らが、没落したとはいえ親王の正妻腹の姫君であつたからであろう。八の宮から子として認められず、社会的には受領の継子としか見られていない浮舟への薫・匂宮のこれまでの対応は、それらとはまったく異なつていた。言つてしまえば浮舟の還俗など、薫や匂宮がその気になればどうにでも出来る問題であり、横川僧都・妹尼はもちろんのこと、浮舟が最後の頼りとする母中将の君も、それに強く抗うとは思えない。あらゆる意味において、今後の浮舟に救済などありえないのである。¹³⁾

五、おわりに

物語展開としていささか無理を冒しながらも、元浮舟付き女房侍従を明石中宮に出仕させた理由は、浮舟生存の情報匂宮に届けるルート作りにあつたと思われる。「夢浮橋」巻以降の物語は、浮舟をめぐる再び薫と匂宮が争うという円環構造をめざしていたのである。そして、そのような一切の救いのない情念の世界へと立ち戻る前に、『源氏物語』作者は筆をおいた。

宇治十帖は薫を主人公としながらも、強く主題性を担うのは八宮の三姉妹の側であつた。まさに女の生きがたさを描き続けてきた到達点として、この「夢浮橋」巻がある。その最後のヒロイン浮舟に再び悲劇的状况が迫っている。薫だ

けでなく、匂宮も彼女の生存に気づくことは時間の問題である。そうなれば、また愛欲の念と相互の対抗心により、その身分差ゆえに彼女の人格などまったく無視した態度をもつて、二人の男性が再び彼女へと接近してくることになる。そこまで筆を進めることなく、彼女が薫からの手紙を人違いとしてさし返す、ささやかな抵抗の姿をもつて物語の幕を下ろすこと、それが作者の出来る精一杯の、浮舟に対する、救済 だったのではないだろうか。

*本稿における『源氏物語』の本文引用は小学館新編日本文学全集版に拠り、適宜、巻数・頁数を記した。

注

- (1) それに先立つ「宿木」巻の「若き人」(五一四八九)、「東屋」巻の「初瀬の供にありし若人」(六一八九)も侍従かと推測される。
- (2) この後、「御はてをも過ぐさず心浅しと見えたてまつらじ」(六一二六六)と侍従が思い、薫に姿を見られまいとする場面がある。
- (3) 野村倫子氏「蜻蛉」の宮の君 — 薫の浮舟評を対女房意識よりみる — (『日本文藝學』三五、平一一・三二)。
- (4) 増田繁夫氏「浮舟の出家」(『源氏物語と和歌 研究と資料 — 古代文学論叢第四輯 —』武蔵野書院、昭四九・四)にも、「薫がかうして知つた以上匂宮も知る可能性があり、薫や匂宮から延びてくる手にまた浮舟は悩まなければならぬ」との指摘があるが、いかにして匂宮がそれを知りうるかについて特に言及はない。
- (5) その研究史は仁平道明氏「暗い(終わり) — 『源氏物語』の結末」(『国文学 解釈と鑑賞』平二二・三)などに詳しい。
- (6) 引用は後の単著収録、今西祐一郎氏「『源氏物語』のゆくえ」(『源氏物語覚書』岩波書店、平一〇・七)に拠る。
- (7) 石田稷二氏「物語の大尾の形式について」(『文学論藻』五四、昭五四・一一)。
- (8) 室伏信助氏「『とど本に』と『とど結び』」(『磯』一九〇、平一四・八)。

- (9) 注(5)の仁平論文。
- (10) 藤井貞和氏「思ひ寄らぬくまな」き薫(『源氏物語論』岩波書店、平二二・三)。
- (11) 拙稿「蜻蛉」巻後半の薫像——肥大化する対句宮意識——(『源氏物語の展望 第九輯』三弥井書店、平二三・四)。
- (12) 大朝雄二氏「夢浮橋巻論」(『源氏物語統篇の研究』桜楓社、平三・一〇)。
- (13) 廣田收氏「入水しない浮舟、成長しない薫」(『源氏物語 宇治十帖の企て』おうふう、平一七・一二)にも、「物語は救いよりも、救いのなさを描こうとしているのではないか」との指摘がある。